

思い出草

寺田寅彦

青空文庫

芭蕉ばしやうの「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」はあまりに有名で今さら評注を加える余地もないであろうが、やはりいくら味わつても味わい尽くせない句であると思う。これは芭蕉のいつしよ一生うが涯うがの総決算でありレジュメであると同時にまたすべての人間の一生涯のたそがれにおける感慨でなければならぬ。それはとにかく、自分の子供の時分のことである。義兄に当たる春田居士しゆんでんこじが夕涼みの縁台でばんしやく晩酌ばんしやくに親しみながらおおぜいの子供らを相手にいろいろの笑談をして聞かせるのを楽しみとじていた。その

笑談の一つの材料として芭蕉のこの辞世の句が選ばれたことを思
い出す。それが「旅に病んで」ではなくて「旅で死んで」という
エディションになっていた。それを、首を左右にふりながら少し
舌の滑動の怪しくなった口調で繰り返し繰り返し詠嘆する。その
様子がおかしいので子供はみんな笑いこけたものである。しかし
今になって考えてみると、かなり数奇すうきの生涯を体験した政客であ
り同時に南画家であり漢詩人であった義兄春田居士がこの芭蕉の
句を酔いに乗じて詠嘆していたのはあながちに子供らを笑わせる
だけの目的ではなかったであろうという気もするのである。そう
してそれを聞いて笑いこけていた当時子供の自分の頭にもこの句
のこの変わったエディションが何かしら深い印象を刻んだという

ことも今になって始めて自覚されるようである。

二

「落ちざまに虻あぶを伏せたる椿つばきかな」漱石先生の句である。今から三十余年の昔自分の高等学校学生時代に熊くまもと本もとから帰省の途次門も司じの宿屋である友人と一晚寝ないで語り明かしたときにこの句についてだいたいいろいろ論じ合つたことを記憶している。どんな事を論じたかは覚えていない。ところがこの二三年前、偶然な機会から椿の花が落ちるときにたとえそれが落ち始める時にはうつ向きに落ち始めても空中で回転して仰向きになろうとするような傾

向があるらしいことに気がついて、多少これについて観察しまた実験をした結果、やはり実際にそういう傾向のあることを確かめることができた。それで木が高いほどうつ向きに落ちた花よりも仰向きに落ちた花の数の比率が大きいという結果になるのである。しかし低い木だとうつ向きに枝を離れた花は空中で回転する間がないのでそのままにうつ向きに落ちつくのが通例である。この空中反転作用は花冠の特有な形態による空気の抵抗のはたらき方、花の重心の位置、花の慣性能率等によって決定されることはもちろんである。それでもし虻が花の蕊しんの上にしがみついてそのままに落下すると、虫のために全体の重心がいくらか移動しその結果はいくらかでも上記の反転作用を減ずるようになるであろうと想

像される。すなわち虻を伏せやすくなるのである。こんなことは右の句の鑑賞にはたいした関係はないことであろうが、自分はこういう瑣末さまつな物理学的の考察をすることによつてこの句の表現する自然現象の現実性が強められ、その印象が濃厚になり、従つてその詩の美しさが高まるような気がするのである。

三

漱石先生の熊本時代くまもとじだいのことである。ある日先生の宅で当時高等学校生徒であつた自分と先生と二人だけで戯れに十分十句じつぶんじゅうくというものを試みたことがあつた。ずいぶん奇抜な句が飛び出して

愉快であつたが、そのときの先生の句に「つまずくや富士を向こうに蕎麦そばの花」というのがあつたことを思い出す。いかにも十分十句のスピードの余勢を示した句で当ても笑つたが今思い出してもおかしくおもしろい。しかしこんな句にもどこか先生の頭の働きの特徴を示すようなものがあるのである。たぶんやはりその時の句に、「橐駝たくだ呼んでつくばい据すえぬ梅の花」というのがあつた。その「たくだ」がむつかしくてわからず、また田舎者いなかものの自分にはその「つくばい」がなんだかわからなくて聞いたのであつた。また別なときに「筋違すじかいに葱ねぎを切るなり都ぶり」という句を君はどう思うと聞かれたときも句の意味がわからなかつた。説明を聞かされて事からはわかつたがどこがいいのか了解できなかつ

たので、それは月並みじゃありませんかと悪口を言ったものであった。今考えてみるとやはりなかなか巧妙な句であると思う。

四

俳句がいわゆる「不易」なものの一断面「流行」の一つの相を表現したものである以上、人の句を鑑賞する場合における評価が作者と鑑賞者との郷土や年齢やの函かんすう数で与えられるのは当然であらう。これは何も俳句に限ったことでもないと思われる。「おとろえや齒に食いあてし海苔のりの砂」などという句でも若いころにはさっぱり興味がなくてむしろいやみを感じたくらいであったの

が、自分でだんだん年を取ってみるとやはりそのむしろ科学的な
真実性に引きつけられ深く心を動かされるようである。明治の昔
ホトトギスの若い元気な連中が鳴雪翁めいせつおうをつかまえてよくいじめ
た時代があったのを思い出すのである。

(昭和九年一月、東炎)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思い出草

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>